

適性検査Ⅰ

1 次の会話文は、太郎君と花子さんが、稲作について先生と話し合っているときのものです。これを読みながら、あとの問いに答えなさい。

先生：5月に田植え体験をさせていただいた農家から、収穫の時期なので、みなさんでいらしてくださいと連絡がありました。そこで、来週の日曜日に希望者をつのってお手伝いに行こうと考えています。

花子：私たちの植えた苗は、無事に育ったのかな。

太郎：楽しみです。ぼくは、ぜひ参加したいと思います。

先生：では、せっかくです。少し稲作について学習をしておくことにしましょうか。

イネには、熱帯原産の陸稲と温帯原産の水稲があります。陸稲というのは畑にじかにまいて育てる種類で、水稲というのは、5月にみなさんも体験したように、水を張った田んぼに苗を植えて育てる種類です。おさらいのために、資料1の表に米作りの1年間をおおまかにまとめておきましたので参考にしてください。

資料1 米作りの1年

3月	塩水選	よい種もみを見分けるために、塩水にしずむものだけを選び出す
4月	田おこし	田に肥料をまいて耕し、よい土を作る
	しろかき	耕した田に水を張って土地を平らにならす
5月	苗を育てる	苗代に種もみをまいて丈夫な苗を育てる
	田植え	12cm程度に育った苗を、4本1株にして田に植える
	水の管理	天気に合わせて、田の水量を加減する
6月	稲の成長管理	稲の成長の様子をこまめにチェックする
7月	肥料の追加	成長期に入る稲のために、肥料を追加する
	農薬散布	病害虫から稲を守るため、また除草のために農薬をまく
8月	中干し	一度田の水をぬいて、土中への酸素の供給やガスぬきをする
	水の管理	徐々に水の量を増やし、穂を出す直前の稲へ十分な水をあたえる
9月	水の管理	水入れの間かくを徐々に広げていく
10月	稲刈り	実った稲の穂を刈り取る
	もみの乾燥	もみを適度に乾燥させる
	もみすり	もみがらを取り除く
11月	土作り	田を休ませる前に、来年に向けての土作りをしておく

太郎：一日だけ、しかも苗を植えるだけだったので、つかれたけれどとても楽しかったです。

花子：農家のおじさんに聞いたのだけれど、苗を植えるまでの間に、田んぼを整えたり、苗代で苗を育てたり、実はとても大変な準備が必要なのだそうです。それに、無事収穫するまでには、きっと大変な苦勞があるのだと思います。

適性検査 I

先生：①日本では、縄文時代にはすでに陸稲の栽培が行われていた形跡がありますが、本格的に水稲の栽培が行われるようになったのは弥生時代以降と考えられています。狩猟採集中心の時代には、家族単位でよりよい生活の場所を求めて移住をくり返す生活であったのに対して、稲作を中心とした時代には定住生活が始まります。土地ごと引越すわけにはいきませんからね。そうして労働力の集中によって村が形成され、やがて小国家を築くまでに発展していきます。豊臣秀吉の時代には石高制という制度がしかれて、米が富や権力の象徴となり、それは江戸時代まで続きます。

花子：陸稲と水稲は、育て方以外にどのようなちがいがあがるのですか。

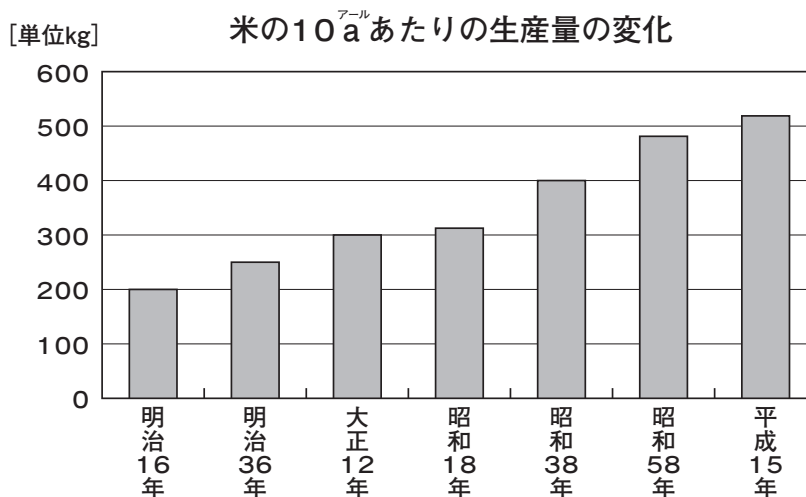
先生：収穫される米の品質と、それから収穫量がポイントですね。実は、稲に限らず畑作では、連作といって同じ作物を数年にわたって栽培すると、次第に発育が悪くなるという障害が occurs。栽培する作物にとって不必要な塩類が、地表付近に蓄積して害をもたらすのです。ところが、この塩類は水に溶けやすいので、雨の多い地域や田んぼではそれらが水路や地下水へと流出して害を防ぎます。それにも関わらず、②世界の稲作の中心は、実は圧倒的に陸稲なのです。日本のように、水稲に極たんにかたよった国は世界でもまれです。

[問題1] ——線部①について、日本では縄文時代から弥生時代にかけて陸稲の栽培から水稲の栽培に転換していった歴史がありますが、会話文を参考に、その理由を説明しなさい。

[問題2] ——線部②について、陸稲から水稲に切りかえていった日本の稲作の例のように、水稲には大きな利点があるのに対し、世界の稲作の中心が陸稲である理由を、会話文を参考にして説明しなさい。

先生：資料2は、明治から平成までの米の生産量の変化のグラフです。

資料2



注：1 a は10m×10m